深江中学校だより

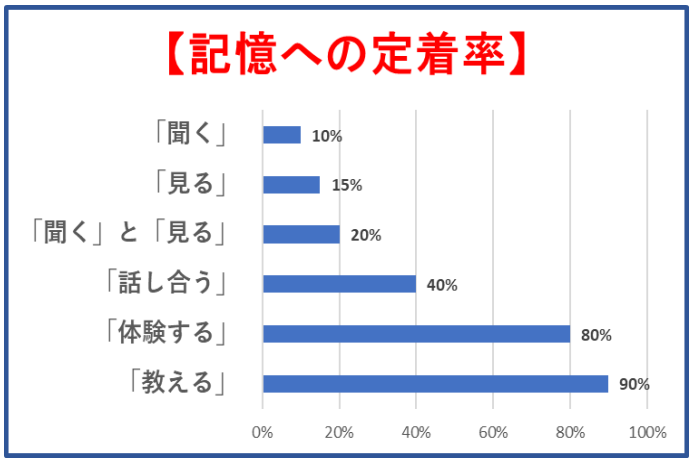
令和６年２月22日
第13号
文責：校長　黒岩　洋史

【学校教育目標】　～社会に貢献できる　人間性豊かで　しなやかな　生徒の育成～
【 スローガン 】 時を守り　場を清め　礼を正す

日中国際学校交流

１月３０日（火）、中国湖南省長沙市の小・中学生２１名が修学旅行で南島原市を訪れ、本校の１年生と交流しました。当初、行事としての計画はありませんでしたが、年末に、南島原ひまわり観光協会から依頼があり、受け入れました。当日は、日中の旗を振って体育館で出迎え、開式の後はそれぞれの出し物（本校１年生は合唱で「夢の世界を」、中国の修学旅行生は、詩の朗読とダンス）を披露し、その後「じゃんけん列車」や「シッティングバレーボール」で交流しました。受け入れが決まってから、１年生は交流会の準備に取り掛かり、どうしたら喜んでもらえるおもてなしができるかを考えながら企画・運営を進めていたようです。進行を日本語と英語で行ったり、役割を分担して会を進めたり、笑顔で温かく接したりなど、心のこもったおもてなしで、たいへん盛り上がった活動となりました。中国からの修学旅行生はもちろん、引率の先生方も大満足で学校をあとにされました。本校の１年生にとっても、貴重な経験ができたようです。

記憶への定着率

「トーク＆チョーク＆ワーク」…何のことだと思われますか？「トーク」とは授業中に教師が話すこと、「チョーク」とは黒板に書く道具のこと、「ワーク」とは授業中に使うワークシートのこと…。「トーク＆チョーク＆ワーク」とは、実は、よくない授業を揶揄した言葉なのです。具体的には、教師の一方的な話を中心に、教科書と板書とワークシートだけで進めていく授業のことです。保護者の皆様が小中学生だったころを思い返してください。どんな授業だったでしょうか？まさに、「トーク＆チョーク＆ワークだった！」という方もいらっしゃるのではないでしょうか？右下に示すような「記憶への定着率」というデータがあります。学びは「聞く」だけでは10%しか身につかないというデータです。これまでの学校の授業スタイルとして長年行われてきた「講義」というスタイルは、「聞く」ことが中心でしたが、「聞く」だけでは記憶への定着率はわずか 10%だそうです。「見る」は 15%。資料や黒板の板書など、視覚情報があると「聞く」だけよりも定着率が若干増加（15%）するようです。「聞く」と「見る」を合わせると定着率は 20%。教師や友達等と「話し合う」活動を取り入れると40%。最近では、グループでの話し合いの活動を授業にいれるのも頷けます。学びに関することを実際に「体験する」と、80%が記憶として定着するそうです。「体験学習の重視」「失敗から学ぶ」などが叫ばれるのも分かります。これが、人に「教える」となると、記憶への定着率が 90%にもなるそうです。今、高校等で「探究的な学び」が盛んに行われ、プレゼンテーションの機会を多く設けているのは、このことも理由としてあるのかもしれません。もちろん「トーク＆チョーク＆ワーク」が全てダメな訳ではないですし、記憶は個人差もあり時間の経過とともに薄れていきますので、一概には言えないと思いますが、保護者の皆様も参考になるデータではないでしょうか？ちなみに、約 2,500 年前、老子は、「聞いたことは忘れる、見たことは覚える、やったことは分かる」と説いています。

これらのことは本校教職員にも伝えており、「言語活動の充実」や「主体的・対話的で深い学び」、学習活動・学習指導方法の工夫や改善、電子黒板・一人一台端末等の ICT を活用した授業展開など、共通理解を図って授業に取り組んで参ります。